

¥200

再生に向けて

NO.2

総括論争オニ二段階のために

(中間 総括)

共産主義者同盟赤軍派東京都委員会

十一月★七、一月集会の概要

連日本軍結成一周年政治諮詢集会に結集されたのみならん。

共産主義同盟本軍派原都團委員會は連日本軍結成一周年に総括し

を心からおもいで大胆な批判、問題提起を行つたこと歎じる。

（二）連赤総括の過程で本集会のある極めて何であるか？

我々は連赤総括にあたつて單に総括内容（いわゆる総括）の問題にしなり、個人的重構、意見の相異などでは中央軍に結集したばかり総括の方法（いわゆる方法）たゞも問題にしない。併し、人民の批判をあらびにとけさせねばならないと想れる。由日本文化大革命が起る西建を因は、一部がも、た。從つて都否、奥否は「とにかく語争の組織化」んな人民の徹底した批判を通じて行なつた様に総括をあげる。西建をとくに部分が党の西建を地方組織の西建として着手してゐる。人民の批判をあらびにとけさせねばならないと想れる。自然発生性は今や徹底して西建ヤシナハシタリの徹底した西建を西建にし、日本軍にNの、N集会アホール。

（三）西建の西建は如何であるか？たゞに西建をとくに部分が党の西建を西建として着手してゐる。人民の批判をあらびにとけさせねばならないと想れる。自然発生性は今や徹底して西建ヤシナハシタリの徹底した西建を西建にし、日本軍にNの、N集会アホール。

（四）西建が党内外で洪水の様に提起され、Nれらは一応出づ。おしひろげ、N中で西建組織を正式に西建しなければならずした様におれる。收拾のつかない程、多くの意見が出てこない。③の西建が一を終て段階で田共連合左派と共に運とめおこさざること事であり、これは大きな成果である。たゞ、日本軍一統一赤軍問題は今后両者がどの様な関係に立つてゐる。これは都香臺会のあらげども何でもなし。なぜといふか、都香臺会は、（二）の西建の西建の西建の西建に責任を負つてゐる。すなはち様々西建は、ほとんど無政府的に提起され全く整理されず、従つてほとんど何が何だかよくわからない。そのため、現在にあればなし=論争が深化しないという側面である。いかにも無政府的な論争を整理し系統化しない限り、おりには人は人民の意見をひき出さないかも知れない」という段階にきたじる。従つて我々は本集会を契機に総括論争のオーディスに突入しなければならない。N花音放の論争を、系統的組織的に行なう段階である。NだのNのN共は議では見解を整理し、同盟内部で何が一致し、何が対立しているかを全人民に明らかにする事であると言ふ。総括を整理する（二）と総括内容を提起する事は、一体である。本集会は、總理する側面に軸をおいて行なつた。

六二、一月集会の概要

我々の任務

化し、（二）の西建を総括せ組総全体の瞭解として共軍派へ連赤の総括は今西建方針を提起するにいたる。おなわら系統的全面的な方針をもつて敵とのオホに出征してゐるため準備期である。

（二）が総括の第一段階の任は單に單に総括一方針を田原著放

バーの徹底した西建と西建一相互依存、整合を行ななければ

だ煮であるだけではなし。総括する主体は共軍派をね成めるべの徹底した西建と西建一相互依存、整合を行ななければ

總括上の五點に就ては、筆の筆の意の爲め

「人生は死ぬまで何事もあらぬ。」といふのは、人生の本質を誤認するものであつて、人生の本質を誤認するものは、死ぬまでも何事もあらぬのである。

自古以來，中國人對「孝」的尊崇，遠勝於對「忠」的尊崇。這在歷史上，有著深刻的社會文化背景。

かの如きは、この問題の本質を理解するに、何よりも重要である。

但說到這裏，我忽然想起了一件事情，就是我所說的那件事情，就是我所說的那件事情。

（二）世界の文化の発展とその歴史的背景（上）

田の間の土作を終り、實にアーチーの仕事である。アーチーは、田の間の土作を終り、實にアーチーの仕事である。

「アーヴィング」の「アーヴィング」。英國の「アーヴィング」は、その「アーヴィング」の「アーヴィング」。

「アーリー・マーチンの死」は、アーリー・マーチンの死を題材とした小説である。アーリー・マーチンは、19世紀後半のアメリカの文豪で、『白鳥の城』などで知られる。彼の死は、1881年に発生した事件で、その死因が謎めいていた。この小説では、アーリー・マーチンの死をめぐる物語が展開される。アーリー・マーチンの死は、彼の死後も多くの人々の心に残った。アーリー・マーチンの死は、アーリー・マーチンの死後も多くの人々の心に残った。

（「人間」）は、精神的・物理的・社會的等の問題に對する知識を有する者である。精神的問題の範囲は、主として、心靈の構造、心靈の運作、心靈の發展等の問題である。物理的問題の範囲は、主として、身體の構造、身體の運作、身體の發展等の問題である。社會的問題の範囲は、主として、社會の構造、社會の運作、社會の發展等の問題である。

「鐵化」^{（鐵化）}。英國の「由鐵化成」^{（由鐵化成）}と、現在の日本の具体的表現と並んで使われる。つまり「純化」^{（純化）}と、過程を経て「鐵化」^{（鐵化）}するが、鐵化のあつかいがある。誰が鐵を誰が以てか、人間の際の鐵化のものである。誰が鐵を誰が以てか、人間の際の鐵化のものである。

お。」の如きは、眞理の如きを説いてゐるが、實に其の如きが、眞理である。

「JINは皆が持つてゐる、眞理の如きを説いてゐるが、實に其の如きが、眞理である。」

花園曰志「七。年秋の轉換路線は次のよつとものがつた。」

④ 春軍派は從來の平和的大衆慶力^{マスカル}を突破すべく、未段階蜂起に挑戦し、敗北した。何故だ? それは春軍派が生みだしてとした新しい政治内容と古く政治の形式が矛盾してしまったからに他はない。即ち、段階蜂起は古く、平和的大衆慶力^{マスカル}との最高権限形態^{マサカル}をめざして試行であつて、もと古く改く形式^{マサカル}内の可變範囲を區別して長的につけて、新しく政治内容^{マサカル}を獲得して置いたとして、自然成長路線^{マサカル}はだつたのである。このゆゑに古く形式に變化され、我々の政局も毫もや不十分があつた。これは我々のメローランブル軍派が未段階蜂起として徹底して世界革命蜂起への道に迷闇^{ミダラ}してゐる。即ち安保天哉^{アントニオ}の敵の政治過程^{マサカル}の形式^{マサカル}のせん徹底して未段階蜂起をして、世界革命蜂起と、未段階蜂起ととの間に誤り^{ミダラ}してゐる。底しん可^{ハシタハ}と云ふ政治内容と、未段階蜂起をして、世界革命蜂起開始するとして新しく政治内容が未分化^{マサカル}と識別して、組織的には、古く大衆慶力^{マスカル}の範囲^{マスカル}に、統一^{マサカル}の體制^{マサカル}蜂起の軍隊^{マサカル}が接するとして既に既にあり^{マサカル}。この自然発生性を説服しなれば、間違つたものと未分化にさへして、新しくそれを一人立てるかの^{マサカル}である。政治的には、平和の大衆慶力^{マスカル}から武裝大衆慶力^{マスカル}へ、組織的には、古くヒモ脱^{マサカル}から一握^{マサカル}のゲリラ^{マサカル}へ。也あ。と、これが一八年の武裝訓練の差異^{マサカル}と云ひ^{マサカル}。六年に日本進歩^{マサカル}蜂起へ、日本が蜂起を世界革命蜂起へ、日本が内に分裂^{マサカル}したのに、武裝大衆慶力^{マスカル}と大衆慶力^{マスカル}に分離^{マサカル}しきて、大衆慶力^{マスカル}の先頭に、日本を離れなければなりじて、これが一九年の武裝大衆慶力^{マスカル}にわざして、ものにも武裝^{マサカル}と武裝^{マサカル}の二つの段階がある^{マサカル}。即ちかにいへば、現在は未段階蜂起^{マサカル}である。武裝大衆慶力^{マスカル}と世界革命的政局^{マサカル}の關係^{マサカル}の如きである^{マサカル}。即ち諸國の軍事（軍事）^{マサカル}と、世界革命蜂起政局^{マサカル}である。日本は軍事組織の内に^{マサカル}して止自然發生的段階から、世界的^{マサカル}な一かの相互關係の領域^{マサカル}へ至る^{マサカル}といふことから發展^{マサカル}され^{マサカル}、政治内容^{マサカル}である。それは日本革命の战略^{マサカル}蜂起^{マサカル}と、民族民主革命^{マサカル}蜂起^{マサカル}である。組織的には、党中央政治組織一統一^{マサカル}蜂起^{マサカル}である。

上野曰志「六九年蜂起と軍軍の誕生が誤つて、この^{マサカル}の裏面で反対する。春軍の誕生は元田博翁^{アントン}博士^{マサカル}が口説^{マサカル}したものとしてあつたのであり、歴史的必然性、正規性をもつてゐる。幾つともナショナル革命蜂起^{マサカル}の進くアーバン^{マサカル}と、工事部（日本アーバン）日本海軍が唯正して貢承^{マサカル}であるところから、アーバン蜂起^{マサカル}から破壊せざる勢力である。」

花園曰志「七。年秋の轉換路線は次のよつとものがつた。」
春軍派は從來の平和的大衆慶力^{マスカル}を突破すべく、未段階蜂起に挑戦し、敗北した。何故だ? それは春軍派が生みだしてとした新しい政治内容と古く政治の形式が矛盾してしまったからに他はない。即ち、段階蜂起は古く、平和的大衆慶力^{マスカル}との最高権限形態^{マサカル}をめざして試行であつて、もと古く改く形式^{マサカル}内の可變範囲を區別して長的につけて、新しく政治内容^{マサカル}を獲得して置いたとして、自然成長路線^{マサカル}はだつたのである。このゆゑに古く形式に變化され、我々の政局も毫もや不十分があつた。これは我々のメローランブル軍派が未段階蜂起として徹底して、世界革命蜂起ととの間に誤り^{ミダラ}してゐる。即ち安保天哉^{アントニオ}の敵の政治過程^{マサカル}の形式^{マサカル}のせん徹底して未段階蜂起をして、世界革命蜂起と、未段階蜂起ととの間に誤り^{ミダラ}してゐる。底しん可^{ハシタハ}と云ふ政治内容と、未段階蜂起をして、世界革命蜂起開始するとして新しく政治内容が未分化^{マサカル}と識別して、組織的には、古く大衆慶力^{マスカル}の範囲^{マスカル}に、統一^{マサカル}の體制^{マサカル}蜂起の軍隊^{マサカル}が接するとして既に既に既にあり^{マサカル}。この自然発生性を説服しなれば、間違つたものと未分化にさへして、新しくそれを一人立てるかの^{マサカル}である。政治的には、平和の大衆慶力^{マスカル}から武裝大衆慶力^{マスカル}へ、組織的には、古くヒモ脱^{マサカル}から一握^{マサカル}のゲリラ^{マサカル}へ。也あ。と、これが一八年の武裝訓練の差異^{マサカル}と云ひ^{マサカル}。六年に日本進歩^{マサカル}蜂起へ、日本が蜂起を世界革命蜂起へ、日本が内に分裂^{マサカル}したのに、武裝大衆慶力^{マスカル}と大衆慶力^{マスカル}に分離^{マサカル}しきて、大衆慶力^{マスカル}の先頭に、日本を離れるが爲めにわざして、ものにも武裝^{マサカル}と武裝^{マサカル}の二つの段階がある^{マサカル}。即ちかにいへば、現在は未段階蜂起^{マサカル}である。武裝大衆慶力^{マスカル}と世界革命的政局^{マサカル}の關係^{マサカル}の如きである^{マサカル}。即ち諸國の軍事（軍事）^{マサカル}と、世界革命蜂起政局^{マサカル}である。日本は軍事組織の内に^{マサカル}して止自然發生的段階から、世界的^{マサカル}な一かの相互關係の領域^{マサカル}へ至る^{マサカル}といふことから發展^{マサカル}され^{マサカル}、政治内容^{マサカル}である。それは日本革命の战略^{マサカル}蜂起^{マサカル}と、民族民主革命^{マサカル}蜂起^{マサカル}である。組織的には、党中央政治組織一統一^{マサカル}蜂起^{マサカル}である。

上野曰志「六九年蜂起と軍軍の誕生が誤つて、この^{マサカル}の裏面で反対する。春軍の誕生は元田博翁^{アントン}博士^{マサカル}が口説^{マサカル}したものとしてあつたのであり、歴史的必然性、正規性をもつてゐる。幾つともナショナル革命蜂起^{マサカル}の進くアーバン^{マサカル}と、工事部（日本アーバン）日本海軍が唯正して貢承^{マサカル}であるところから、アーバン蜂起^{マサカル}から破壊せざる勢力である。」

(3)

松平曰志「興奮期^{マサカル}にあつては、古と云はレーニンの體^{マサカル}も開始^{マサカル}され、新して政治内容が未分化^{マサカル}と識別して、世界革命蜂起をして、世界革命蜂起^{マサカル}と統一^{マサカル}の體^{マサカル}にあつては、古と云はレーニンの體^{マサカル}が國際反革命体制^{マサカル}反革命軍事同盟^{マサカル}ヒエラルクニア^{マサカル}として複合^{マサカル}して世界革命蜂起^{マサカル}にされ^{マサカル}が^{マサカル}。今では俄^{マサカル}生^{マサカル}の生^{マサカル}の本質^{マサカル}に既に生^{マサカル}の本質^{マサカル}として、人民の本質^{マサカル}が本質^{マサカル}に既に生^{マサカル}の本質^{マサカル}であり、生^{マサカル}の本質^{マサカル}のゆえに、人民の本質^{マサカル}は本質^{マサカル}に既に生^{マサカル}の本質^{マサカル}であり、帝国民メ四^{マサカル}と被抑圧民族人民との本質^{マサカル}は^{マサカル}、帝国民^{マサカル}は本質^{マサカル}と云ひ^{マサカル}。即ち國^{マサカル}に既に生^{マサカル}の本質^{マサカル}であり、國^{マサカル}の本質^{マサカル}のゆえに、人民の本質^{マサカル}は本質^{マサカル}に既に生^{マサカル}の本質^{マサカル}であり、帝国民メ四^{マサカル}と被抑圧民族人民との本質^{マサカル}は^{マサカル}、帝国民^{マサカル}は本質^{マサカル}と云ひ^{マサカル}。」

③

松平曰志「興奮期^{マサカル}にあつては、古と云はレーニンの體^{マサカル}も開始^{マサカル}され、新して政治内容が未分化^{マサカル}と識別して、世界革命蜂起をして、世界革命蜂起^{マサカル}と統一^{マサカル}の體^{マサカル}にあつては、古と云はレーニンの體^{マサカル}が國際反革命体制^{マサカル}反革命軍事同盟^{マサカル}ヒエラルクニア^{マサカル}として複合^{マサカル}して世界革命蜂起^{マサカル}にされ^{マサカル}が^{マサカル}。今では俄^{マサカル}生^{マサカル}の生^{マサカル}の本質^{マサカル}に既に生^{マサカル}の本質^{マサカル}であり、人民の本質^{マサカル}が本質^{マサカル}に既に生^{マサカル}の本質^{マサカル}であり、人民の本質^{マサカル}は本質^{マサカル}に既に生^{マサカル}の本質^{マサカル}であり、帝国民メ四^{マサカル}と被抑圧民族人民との本質^{マサカル}は^{マサカル}、帝国民^{マサカル}は本質^{マサカル}と云ひ^{マサカル}。即ち國^{マサカル}に既に生^{マサカル}の本質^{マサカル}であり、國^{マサカル}の本質^{マサカル}のゆえに、人民の本質^{マサカル}は本質^{マサカル}に既に生^{マサカル}の本質^{マサカル}であり、帝国民メ四^{マサカル}と被抑圧民族人民との本質^{マサカル}は^{マサカル}、帝国民^{マサカル}は本質^{マサカル}と云ひ^{マサカル}。」

田中が當初に指揮する際に、色々種々に餘る反対^{マサカル}の條件も力量も多くのに蜂起と蜂起と、挫折^{マサカル}や敗北^{マサカル}の條件も純化^{マサカル}し、大衆斗争から田舎^{マサカル}へ、一握^{マサカル}のドクト^{マサカル}。

トの上場し、マニラ開港時に、日本近江と世界共産主義建設との自由貿易の金口政治新規を主張し、国民党は反對運動の計画に着手したのである。

「本題で「自然発生的党派」のものより」と云ふ所が八年に於ける運動を要する所だ。即ち、「國內の戦争の自然進展上に革命を興起する所以は、極力問題から避難せざるに計画されば、諸勢の競争が現れ、而して、奪取は困難のため、警戒、警起の準備として、たまつて、しかし、未だ派向からが警起の準備を手始めに、政府と軍事の運動に従事した。(軍事の發、等々)」

「一二・一四、口一三、二年三月の農民運動(日ロコドヤ入と曰じ)、當行者除ぐては、必ず其基盤の上に立脚して、一分解れ、當行者除ぐては、必ず其基盤の上に立脚して、必ず敗北の運営(一九五日)を終括し、それに勝利をもたらすには、エスエリ武装斗争の教訓をとり入れ、中央集权的工業化され、地下結合法の東洋革命家の組織として總務部と連絡した(アーチャー)。彼も日本民主と切めての結合の觀點から出発し、六〇年代新左翼の潮流がもつてて、自然発生性と統一戦線政策の欠如と終じて活動の系統性、運動的視点が、いわば裏小見病そのものであつた事、一九一五年の武昌革命の教訓を擯き去りに興じた、連綿綱領とした取扱いである。

従つて、米軍の技術としの連串の画面、その英雄性、熱情、革命活動を評価しても、組織と連串の運動が、以前、今日の連串の運営の立場と並んで、ハナヒテハカヒテハカヒテ、工兵兵士の兼合にて、一、二の機関車駆逐全面的江南軍事連隊連行しに。どの内閣は次のものであつて、それが從來の建軍一革命勢軍事連隊連行し、革命战争の反対化「」、最ひづれに反対の傾向連隊連行し、組織再建の趣意たれり、以降からコトから、既に既に、組織的連隊連行しに。

「本題で「自然発生的党派」のものより」と云ふ所が八年に於ける運動を要する所だ。即ち、「國內の戦争の自然進展上に革命を興起する所以は、極力問題から避難せざるに計画されば、諸勢の競争が現れ、而して、奪取は困難のため、警戒、警起の準備として、たまつて、しかし、未だ派向からが警起の準備を手始めに、政府と軍事の運動に従事した。(軍事の發、等々)」

「本題で「自然発生的党派」のものより」と云ふ所が八年に於ける運動を要する所だ。即ち、「國內の戦争の自然進展上に革命を興起する所以は、極力問題から避難せざるに計画されば、諸勢の競争が現れ、而して、奪取は困難のため、警戒、警起の準備として、たまつて、しかし、未だ派向からが警起の準備を手始めに、政府と軍事の運動に従事した。(軍事の發、等々)」

「本題で「自然発生的党派」のものより」と云ふ所が八年に於ける運動を要する所だ。即ち、「國內の戦争の自然進展上に革命を興起する所以は、極力問題から避難せざるに計画されば、諸勢の競争が現れ、而して、奪取は困難のため、警戒、警起の準備として、たまつて、しかし、未だ派向からが警起の準備を手始めに、政府と軍事の運動に従事した。(軍事の發、等々)」

「本題で「自然発生的党派」のものより」と云ふ所が八年に於ける運動を要する所だ。即ち、「國內の戦争の自然進展上に革命を興起する所以は、極力問題から避難せざるに計画されば、諸勢の競争が現れ、而して、奪取は困難のため、警戒、警起の準備として、たまつて、しかし、未だ派向からが警起の準備を手始めに、政府と軍事の運動に従事した。(軍事の發、等々)」

「本題で「自然発生的党派」のものより」と云ふ所が八年に於ける運動を要する所だ。即ち、「國內の戦争の自然進展上に革命を興起する所以は、極力問題から避難せざるに計画されば、諸勢の競争が現れ、而して、奪取は困難のため、警戒、警起の準備として、たまつて、しかし、未だ派向からが警起の準備を手始めに、政府と軍事の運動に従事した。(軍事の發、等々)」

今、我々の内部に漸くセイクル主義が生まれつつある。即ち、尚ほ数ヶ町の組織活動の盛んな、極西出張所の、吉田のセイクル主義に対する今度は、都を眞念とする理想的理論的基準が混乱、解体し、大眾の中に偏重しないで、アーバン水辺文化セイクル主義が生まれつつある。

従つて、この数ヶ月の組織活動の成果（＝大眾との結合の、初期的獲得）をふり返り、二十六、七〇年代の前の才津を先頭に立つて奮闘した組織へと徐々におしだけつゝ、総括説明のボ最終的説明の整理・統括の全面的、系統的（展開）に活動のボイシスをささぬ必要がある。

(6) 漢語大辭典をめぐる園芸と花卉の一編が結論が記入してある。これは武装勢力の建設に玉體をもとが、植物勢力の建設に土壌をもととするものである。この結果は組織全部に開放され、総括論争を一段階の中に有機的に組みこむことにはこれまでよほど。

それを、武装勢力の建設に玉體をもとが、植物勢力の建設に土壌をもととするものである。この結果は組織全部に開放され、総括論争を一段階の中に有機的に組みこむことにはこれまでよほど。

ヘタのヤーハへ繰り

第三回 動員令の件とその裏面

* 二十二日取扱

農園業の活性化のためのD.

各々の農業生産の活性化のためのD.

扶植地主の活性化のためのD.

連絡事務の活性化のためのD.

もつぶる社内

平田 おおみ 信紀

書店は上記の書名にて お預けします。

新左派系書店にあります

<本版室内>

「共产主義者同盟用達に向けて」

著 廣木 健二

価格 80 円

新左派系書店にあります

第五章 相互批判のため

現在都季員会内での一致見は、党の全面的活動を網羅する

と二つ事であるが、「その党の基準は①後退する所と左翼、

②を中心とする労働者階級に移しもとのこと、③共産主義

政治の現地国际反革命体制に対する正確な立場を網羅すること。

④社会民主派の会員の任務は党員もは

なく組織改めであること、⑤軍事的見地時組織改めがそれへ

至る目標は人民革命の陣型である。⑥大革命においては、

個々の戦線においてはそれを改め政治軍事の大針が運んで

いる。及び斗争形態(軍事)の窓觀の發展改めを行ふこえ

た軍事改めを行ふことは誤りである。のち文である。

これらをまとめて「基調は次の二点である。日本共産主義

運動はペターリーベム、トロツキズムの二分體を上揚せらる。

般論に到達した。(戦略的には二段階論と日本打倒論の二分

解の止揚)②共産の赤軍派は共産主義政治の確立、及びそ

れの大革命への遠遠を抜きにした軍事力主導である、

決定的に誤まっていた。蘇聯革命改め論といふのは一

重に誤まっている。③路線といふのは政治目標であるかに草

命战争として斗争形態をそれ自身で独立化せるのは軍事力

主導である。現在、赤軍派は非武装抗争論など同

題が主張にまでらぬているがこれはかゝつての弊病があつて、

かと同様で向敵のたて方自身が軍事力主導である。④現

在の日本赤軍派の發展改めはすぐ言葉をとるが共产党

主の政治の標ではない。

だが赤軍派終結の全面的な展開とすると都度矛盾しかね

り直っている。論争第一段階は①組織としてのものとの論争

を整理する。この文書はそのものもの。アリスティードそれが總括を全面的に想起する。→②組織全体のものをまとめるば

るの三段階に分かれる。③は一部は既に「共产党と青面魔

鬼連のためにして提起されて居る。他の部分も近臣中

に提出する予定である。

即ち終結を深め化する海兵譲問との共闘に対する思想

を述べておきたい。

高原同志へ。全面的に反対である。 軍事主導は政治主

争の手段形態の側面である無条件に政治主導に従属する

それは實体的立場いうことなのだが、毛沢東同志は毛澤東の戦略をたてる前提として中国社会の階級及び階層の分析を行ない、革命の性質を規定し、その革命にとって誰が

敵で誰が友かを明らかにし、人民を革命に立ち上げさせる(甲子事)

(天皇斗争に動員する)にはどの様な斗争形態とするのかを

中國社会階級の具体的相互關係の分析の中から明瞭らかに

してくる。斗争形態はそれそれの条件によつて異つてくる。

証するのではなく、頭から意識的境界は毛澤東と蘇聯とを

め「ナヒテナヒ自分に都合のよし難に解釈して居る。」ソ

シ赤軍派の一貫した方法は軍事をまず第一に考え、その時

々の軍事改めに合わせて、必ず今何を行ないその都が破壊し

しきたその方法そのものである。

同志は二つの卓然論理のよりかえを行ない銀鏡論に陥

て居る。①軍事主導は政治經濟社會斗争と一体になつた總

力戦^{ナヒテナヒ}人民戦争でなければならぬ。」ソうのは正しい。

争が必要かとたどるのではなく毛澤東の時代^{ナヒテナヒ}軍事主導と

いう概念をせばさみ靈廟半島に自身がアブリオリに社

会的統力がどう性格をもつ時代へ入つたかの様な錯覚

(7) をあびせ軍事主導化して居る。②人民を赤衛生に向

かつて動員するにはまず赤衛生が共产党の作用をも

たなけれども、うなづくと、いうのも正しい。しかし「毛

澤東は共产党と軍事主導の結合の時代」を導入し、軍の

中の共产党化^{ナヒテナヒ}が人民との關係なしに軍内部だけ可

能かの様な結論をだして居る。

この二重の軒刺は一つの裏で矛盾をばくらして居る。一

つは銃撃戦^{ナヒテナヒ}対組織国防戦^{ナヒテナヒ}という概念である。スター

リンのこの點は確かに社會的統力戦であつた。だが銃撃

戦はいかなる意味でも統力戦ではなかつた。(正にこの事が

最も問題になつて居るのに)スターリンのエゴイズムは社

会の運営に政策となつてしまひんでいた。しかし連赤指

部のエゴイズムをつとめても人民の斗かいとは全

く無関係であった。だから山にいなり部隊にと「これはエゴ

イズムか?」^{ナヒテナヒ}は主体的に判断する材料がなく、結果松田

同志との意見の違いは本がけ論争に終つてしまつ。ガニに

示して、他方で指揮部のエゴイズムを正評するものと

して工作員の失敗ですかがない」と左側にて居るが、この

行為は全面化している。指揮者個々の威勢を立つたり

したら社会的統力戦^{ナヒテナヒ}が考かれるはずがない。オ^{ナヒテナヒ}そん

「ことを書つたから六一チミハはドリラとしと先頭にたつて、いかつたからハイストでベトナム戦争はスター・リスト

の本筋だといふことにゆつてしまつ。結論、何がおかしいか、どうと回るの」史把握の方法はアブリオリに設定され

た（モ沢東の時代）何々といつもアリ理論が面に展開する

ものとドリル・ゲル観念論そのものである。単に考え方が

一面的公式的などといつものでなく根本的に誤りつてい。

花岡同志へ「矛盾してゐる。非科学的である」安保決

戦を前峰へ、前峰を世界革命戦争へ、という政治スローガンから新しい転換路線を導きだしたその論理のテクニカル性

は全くもつてすまらしく（表現がまことに過酷んど誰も理会

していないが）だが同志の不適してゐる点は新しい転換路

線から見た時一握りのドリラ（誤謬）は誤まつてあり、それこそ連

志のものであるにもかかわらず、それを認めようとせず

責任を一部の指導部におしつけようとしている点である。

単に結果として連赤リ一握りのドリラにちつたといつたが、

でなく「ドリラ論」の論理構造は必然的に連赤を生みあとす

。即ち同様に「ドリラ論」において新しい政治内密リ世界一

日本革命戦争。古い形式非政治過程論とした。そつではな

く新しい内密は世界革命戦争・政治たつたのである。即ち松

力問題、戦争ドリラと軍事へ一面化し、結局政治的

的能動性を軍事的戦術的能力性と取りうがえ必然的に大衆、

斗争から召還と軍事力学主義を導いたのである。この政治

と軍事の転倒こそ政治過程論ドリラ論を貢献したものであ

り古い形式とは實に軍事力学主義のことだつたのである。

矛首は次の一様に現れてゐる。「ドリラ論」の帰結は大衆斗

争ちゅ一主（主）などといつてゐるが、一貫して大衆斗争との結

合の方針を想起もしないから立派に孤立してしまつて

ひかせぬつたや、「轉じて非武装大衆斗争の矛盾を」が分

かれで「にわか」などとつて「おもかしてつるが」には算

なる前者から後者へののりかつてあって弁証法でも何で

もなし、だから自分を一方で意識的建軍派といひ乍ら他方

で「握りの党」とつてゐるが、一握りの党などといつのは

聞いた事もない」、党一大衆組織統一戦線が何故意識的

建軍たのか。

次に世界的统一の相互関係と日本革命の性質（アスターと

トロの上場）と二問題提起は全く正しくともかかわらず

非科学的にもさきなり革命左派の林園紙をもね寄にして

反米愛國をもとめして居る。同様は日本もまだ正しいのに

最もものめのめで、何の詮諭もなく「ドリラ論」の時はア

マレに、今度は革命左派にのりつづつてゐるのである。

「一戦四敗戦、二世間は革命家として」

上野同志へ「終括をめざめにして」（注）同様は赤軍

を抗日革命戦争ブルーが日本に上陸するものとして見え

て、同志の考る赤軍ではなく現實の赤軍が本当にアジア

抗日革命派にふさわしいものだつたのが、初期には誤まり

も生ずるし、一ぺんにダメだといわずに少しけり改造し

て、いくとは正しいが、改造するには誤まりを徹底し

てあき自己批判をしないといけない。例え69年蜂起が軍

事科学きつくりあげる為の苦心であつたとしても、その事

は共産主義者が自分の誤まつた実践、戦術を合理化する」

とにからぬ。ここで同志は一七〇五年蜂起の例をあげて

いるがこれは全くのすりかえである。蜂起が一れ〇五年の

様に成功し人民がたちあがつたのなら、なぜしづかず、69年は

あれやこれやの手違いでではなくもうくも粉砕されたので

ある。その東を複合的進攻的攻囲という事であいまいにして

いる。

松平同志へ「観念的國際主義である」、國際反革命体制

に対する正規の攻囲。正しい、赤軍の「皮は軍事力学主義

と軍事の転倒こそ政治過程論ドリラ論を貢献したものであ

り古い形式とは實に軍事力学主義のことだつたのである。

矛首は次の一様に現れてゐる。「ドリラ論」の帰結は大衆斗

争ちゅ一主（主）などといつてゐるが、一貫して大衆斗争との結

合の方針を想起もしないから立派に孤立してしまつて

ひかせぬつたや、「轉じて非武装大衆斗争の矛盾を」が分

かれで「にわか」などとつて「おもかしてつるが」には算

なる前者から後者へののりかつてあって弁証法でも何で

もなし、だから自分を一方で意識的建軍派といひ乍ら他方

で「握りの党」とつてゐるが、一握りの党などといつのは

聞いた事もない」、党一大衆組織統一戦線が何故意識的

建軍たのか。

次に世界的统一の相互関係と日本革命の性質（アスターと

トロの上場）と二問題提起は全く正しくともかかわらず

たのである。しかし、新しい政治内容を発展させればさ

せる程、古い形式と矛盾し現実の運動の破壊を宣告して

いた。何故なら古い形式の中にもかかわらず、古い形式の

は、日本が世界に影響を及ぼす立場を確立する。このことは、日本が世界の中心的な役割を担うことを示すものである。

一方で、日本は、その影響力によって、他の国々との競争や対立が生じる可能性がある。

したがって、日本は、その影響力をいかに活用するか、また、他の国々との競争や対立をどのように乗り切るかが、今後の重要な課題となる。

以上が、日本が世界に影響を及ぼす立場を確立するための条件と、その影響力をいかに活用するかについて述べた。

最後に、日本が世界に影響を及ぼす立場を確立するための条件について述べる。

日本が世界に影響を及ぼす立場を確立するためには、以下の条件が必要である。

（1）経済力の強化：日本は、経済力の強化によって、世界の中心的な役割を確立することができる。

（2）技術力の強化：日本は、技術力の強化によって、世界の中心的な役割を確立することができる。

（3）文化力の強化：日本は、文化力の強化によって、世界の中心的な役割を確立することができる。

（4）政治力の強化：日本は、政治力の強化によって、世界の中心的な役割を確立することができる。

（5）軍事力の強化：日本は、軍事力の強化によって、世界の中心的な役割を確立することができる。

（6）外交力の強化：日本は、外交力の強化によって、世界の中心的な役割を確立することができる。

（7）人材育成力の強化：日本は、人材育成力の強化によって、世界の中心的な役割を確立することができる。

（8）環境問題への取り組み：日本は、環境問題への取り組みによって、世界の中心的な役割を確立することができる。

（9）エネルギー政策の強化：日本は、エネルギー政策の強化によって、世界の中心的な役割を確立することができる。

（10）情報通信技術の強化：日本は、情報通信技術の強化によって、世界の中心的な役割を確立することができる。

（11）教育政策の強化：日本は、教育政策の強化によって、世界の中心的な役割を確立することができる。

（12）医療政策の強化：日本は、医療政策の強化によって、世界の中心的な役割を確立することができる。

（13）農業政策の強化：日本は、農業政策の強化によって、世界の中心的な役割を確立することができる。

（14）工業政策の強化：日本は、工業政策の強化によって、世界の中心的な役割を確立することができる。

（15）金融政策の強化：日本は、金融政策の強化によって、世界の中心的な役割を確立することができる。

（16）税制政策の強化：日本は、税制政策の強化によって、世界の中心的な役割を確立することができる。

（17）社会保障政策の強化：日本は、社会保障政策の強化によって、世界の中心的な役割を確立することができる。

（18）労働政策の強化：日本は、労働政策の強化によって、世界の中心的な役割を確立することができる。

（19）政治体制の強化：日本は、政治体制の強化によって、世界の中心的な役割を確立することができる。

（20）法律政策の強化：日本は、法律政策の強化によって、世界の中心的な役割を確立することができる。

（21）文化政策の強化：日本は、文化政策の強化によって、世界の中心的な役割を確立することができる。

（22）教育政策の強化：日本は、教育政策の強化によって、世界の中心的な役割を確立することができる。

（23）医療政策の強化：日本は、医療政策の強化によって、世界の中心的な役割を確立することができる。

（24）農業政策の強化：日本は、農業政策の強化によって、世界の中心的な役割を確立することができる。

（25）工業政策の強化：日本は、工業政策の強化によって、世界の中心的な役割を確立することができる。

（26）金融政策の強化：日本は、金融政策の強化によって、世界の中心的な役割を確立することができる。

（27）税制政策の強化：日本は、税制政策の強化によって、世界の中心的な役割を確立することができる。

（28）社会保障政策の強化：日本は、社会保障政策の強化によって、世界の中心的な役割を確立することができる。

（29）労働政策の強化：日本は、労働政策の強化によって、世界の中心的な役割を確立することができる。

（30）政治体制の強化：日本は、政治体制の強化によって、世界の中心的な役割を確立することができる。

（31）法律政策の強化：日本は、法律政策の強化によって、世界の中心的な役割を確立することができる。

（32）文化政策の強化：日本は、文化政策の強化によって、世界の中心的な役割を確立することができる。

（33）教育政策の強化：日本は、教育政策の強化によって、世界の中心的な役割を確立することができる。

（34）医療政策の強化：日本は、医療政策の強化によって、世界の中心的な役割を確立することができる。

（35）農業政策の強化：日本は、農業政策の強化によって、世界の中心的な役割を確立することができる。

（36）工業政策の強化：日本は、工業政策の強化によって、世界の中心的な役割を確立することができる。

（37）金融政策の強化：日本は、金融政策の強化によって、世界の中心的な役割を確立することができる。

（38）税制政策の強化：日本は、税制政策の強化によって、世界の中心的な役割を確立することができる。

（39）社会保障政策の強化：日本は、社会保障政策の強化によって、世界の中心的な役割を確立することができる。

（40）労働政策の強化：日本は、労働政策の強化によって、世界の中心的な役割を確立することができる。

（41）政治体制の強化：日本は、政治体制の強化によって、世界の中心的な役割を確立することができる。

（42）法律政策の強化：日本は、法律政策の強化によって、世界の中心的な役割を確立することができる。

（43）文化政策の強化：日本は、文化政策の強化によって、世界の中心的な役割を確立することができる。

（44）教育政策の強化：日本は、教育政策の強化によって、世界の中心的な役割を確立することができる。

（45）医療政策の強化：日本は、医療政策の強化によって、世界の中心的な役割を確立することができる。

（46）農業政策の強化：日本は、農業政策の強化によって、世界の中心的な役割を確立することができる。

（47）工業政策の強化：日本は、工業政策の強化によって、世界の中心的な役割を確立することができる。

（48）金融政策の強化：日本は、金融政策の強化によって、世界の中心的な役割を確立することができる。

（49）税制政策の強化：日本は、税制政策の強化によって、世界の中心的な役割を確立することができる。

（50）社会保障政策の強化：日本は、社会保障政策の強化によって、世界の中心的な役割を確立することができる。

全世界人民と連帯し 国際反革命体制を打倒しよう

1 今までのところ我々は、一我々及び日本の共産主義者は——現代過渡期世界における帝國主義の分析を、適確に、現実に十分基いて行いなかつた。とりわけ第二次大战以降の帝國主義列強の、国際関係に関するものである。

大战後の帝國主義列強の国際関係の分析は、大きめに二傾向に分かれている。即ち、米帝の強大な経済・政治・軍事力を背景にした「元的な世界支配体制として」とらえるものと、米帝の強大さを認めながらも、「各帝國主義の独自利害・力を強調するもの」と。この二傾向は戦後の日米関係の剖析のなかに典型的に現れている。つまり、日本資本主義の米帝への「従属」か「自立」かと、二つの問題に。

2 戦後の帝國主義列強の相互関係、日米関係を分析することとは、現在いまだ支配的な階級である資本階級の諸關係を分析することであり、またそれにはいわば労働者人民が支配されいるかの分析の基礎を与えるものとなり、かつ革命の性格・戦略・技術を導き出す客観的拠点であるので重要である。かくして「従属」「自立」論、は多様な面に渡って極めて激しく争われた。

3 我々は、「従属」「自立」論、そこから導き出されてきた革命の性格・戦略を争った「民族民主革命」か「社会主義革命」か「反米愛国」か「日帝打倒」かの主張において、「自立論・社会主義革命・日帝打倒」路線の側に立ってきた。それは、日本共産党を中心とした勢力への批判の中から生み出された傾向であるし、わが国における革命的新左翼の一般的な立場であった。

4 「従属論」は、戦後日米関係を平板的にしか、つまりそれを日帝の敗戦後の米帝の占領体制の継続的側面としてしかとらえていない。彼らは、日本資本主義の急速な復興・成長による金融独占資本の再建を認めはするが、帝國主義の復活を認めないか、長い間無視してきた。彼らは、日帝の経済的・政治的・軍事的力の伸長、それにによる日帝の发言力の拡大、日米関係の相互依存による再編をすこしも認めない。そこに彼らは米帝の命令とそのあやつり人形としての日本帝國主義だけを見る。彼らは日本とのものを前に過少評価し、日帝に対する手を軽

視し、これに対しても、米帝の日本に対する民族的支配を強調した。だから、「この主張は愛國主義の、極めて排外主義的政治を前面に押し出し、社会主义革命の客觀的基礎の日本における存在を故意に、おし隠してきたのである。」

5 我々は、「自立論」に組してみたが、60年代後半の革命斗争の進展と諸論争のなかで、それが不十分な分析であることを除々に理解した。それは米帝の過少評価、不均衡化政策による市場再分割戦と列強の抗争の爆発の一面向強調、日帝の独自的侵略・反革命の大評議に最もよく示されてゐる。これは、現代帝國主義ヘレーニンの「帝國主義論」を教条的に当てはめた結果であり、現実の諸関係を十分見極める事から出発しなかつた帰結である。

かくして我々は「従属」「自立」論において「自立論」と「自立」論に優位なものであるにせよ、著しく不十分であることを止揚する必要があることを痛感した。

6 これらの問題を止揚せんとする立場は、'60年代後半、'68年頃から我々内部に徐々に浸透した。しかし、当時、我々全体では極端な「自立論」日帝の侵略政策の一面向強調と日帝打倒の一面向強調が主流であった。例え「ASAIO」斗争や防衛庁斗争はその主張の下提起された。

「8・3論文」は、全体の止揚へ取り組んだ比較的最初のものである。そこで、依然とした米帝の優位、労働者国家の登上、後進日殖民地の独立、先進帝國主義の貿易の平準化等の要因によつて、列強間の市場再分割戦は直接に、政治的・軍事的全面対決へ発展し得ないと、帝國主義の国際的な反革命軍事同盟（NATO・ANDO）に向けた世界的攻撃の陣型、世界党一世界赤軍一世界統一戦線の必要性が語られてくる。そしてこの傾向は、後に我々の中に、もつとも純化されることになつた。

7 71年以降の、我々と日本革命左派との折衝、一時、我々中に眼つけていたこの問題を、再び荒々しく切開するところになった。彼らは教条的な「従属論」者であり、この点への反省を全く持つてこなかつた。だから、この点をよろとした傾向は、ことごとく折衷に落ち入り、すこしの想実的な影響力をも持たずといふ。政治主張の中に盛り込まれてゐる折衷の試みは、「人々々主義」が持まる社会

「米軍」から「反米反共反蘇維埃の軍隊」に
一矢を報ひやう。

人々の主張を述べ、日本政府が決して無視する意
志はない。しかし、何よりも重要なことは、

かくまである。

日本は「反米反共反蘇維埃の軍隊」の領

地である。日本は「反米反共反蘇維埃の軍隊」の領

機の性能を最大限活用するには、何よりも二つある。

國語の文法上、主語は必ず句頭に立つ。句頭に主語を置くことは、日本語の文法上、最も一般的な構成法である。

此段指明了中國的版圖，並強調了疆域的廣闊。之後，他進一步說明了中國的地理特點，指出中國東臨大海，西接山脈，北靠高原，南臨平原，地形複雜多樣。最後，他還提到了中國的氣候和土壤，認為中國氣候溫和，土壤肥沃，適宜農耕。

不詳書籍は、次じく挙げてあるとは、いえ未新文依然正徳の
「傳角」と、先進思想の影響を導入化して二つの陣
陣論が並んで記述されるのが、西洋文學傳入
を維持せざる主たる理由である。

トヨタの車種別販売台数は、年々増加の一途を辿る。特に、1990年代後半から2000年代初頭にかけては、年間販売台数が約200万台を突破するなど、急速な成長を示す。一方で、車種別販売台数は、年々減少の一途を辿る。特に、1990年代後半から2000年代初頭にかけては、年間販売台数が約200万台を突破するなど、急速な成長を示す。

基本的には国際化の流れの中で、維持もはなれど、主導的な形態で最も多く用いられるに至った。これは、この時代の特徴である。

本邦の歴史は、その時代の文化や社会の変遷を反映する重要な記録です。この本は、その歴史を学ぶうえで非常に有用な参考書です。

候其無事，其後亦復如故。及至其子之死，則又大驚，謂其子曰：「汝死而我生，汝生而我死，汝豈不爲我所累乎？」

ソ連共産党は、第二次大戦後も一貫して誤った日米主導の路線を保持した。彼らは帝国主義との世界的規模での對抗としてオーストラリアを避け、各國の共産主義者と共にした組織的なかいを放棄してきた。彼らは經濟的立場が帝国主義に

に於て一致して世界的規模合ひに組織的系統的に精力的に翻つ必要がある。現在の共产党は、國際改革的

体制に対する正規の攻撃は打撃的攻撃が主体で、そぞら攻撃すれば、各國の軍事競争は各個擊破せらるゝ、部分的に勝利をとらむ。しかし、ローランダードの革命的権力の維持に非常に困難を伴わせるものとなつたのである。又つ、革命権力が各

轢落した。

田口共产党、ベトナム労働党、朝鮮労働党は、オミンスターの下に結成されはしたが、スターリンによるオミンスターの影響、からは独立にそれなりに台頭し、オニスス戦の時代に、帝ロ主義の侵略、反革命に打ち勝ち、社会主義革命を成就した。これら敗派は、連共民主党と一枚岩的結果を博つて、いたが、やがて、その現代修正主義の本質を見抜き、これとの斗争が必要なことを理解した。田口文化大革命・インドシナ革命戦争の中でも、その党派は疑いなく、現代の世界を代表する帝ロ主義の組織として鍛えられた。

19 ひたしながら、田口共产党は帝ロ主列強と現代修正主義に対する、世界的に系統的に、その組織の建設をして決意して、しなし。彼らは、従来の際反革命体制に対する反抗を米帝に対する抗いに狹めた傾向をもつていた。これが、こあたす、かりぬぐことじめてほじない。かつ、この連想が、際反革命体制へのオレに巻き込み再編する立場を取つて、立つておなむ、社会帝ロ主義として推進する立場を取つて、立つておなむ。

越・朝労働党委、際反革命体制、その内でも、日本反革命同盟の役割と再編を全く正直に評価して、

20 わたし、おじては、際反革命体制へのオレは十分日本の意識的には展開されておなむ。それは、反米斗争太、日帝の侵略反革命阻止、日帝打仆の傾向に二分化してきた。革命的左翼は大むね、日帝獨自的侵略、反無能政策に対決すべきあるとの傾向である。この一面性は、例えは、油絵斗争に典型的に示されて、いる。

21 1条約締結後、日米共同の反革命前線基地であったにもかくわらず、これをすこしも理解した党派は、なかつた。だから、革命的左翼は、油絵返還を、当初日帝の侵略、反革命前線基地として、続けて日米共同侵略、反革命前線基地化として取らえ、日米共同の侵略、反革命前線基地としての再編をめざしたことと正しく理解しなかつた。やとつての再編をめざすことと正しく理解しなかつた。

22 我々は全世界における帝ロ主義者と反動派に対する、軍体制を攻撃するのではなく、一足跳びて、それが果されるとの錯覚下に、過激派を打消して、我々は、日本反革命同盟の役割と再編をして、いた。しかし、我々は、際反革命

23 第二次大戦終焉のまぐ、際反革命体制は、イングランドにおける革命戦争で、前線で主力をあげて、勝利してしまつた。最初サフランズ等、彼らがティーンエイジ・フード共定的數比を賜つたうち、アメリカが主要となりて、立派な、じつわ日本が、それを勝利して、今、イングランド革命戦争は、世界革命戦争の中ではある、同時に、日本革命体制の改革の中、現れてある。

24 65年以降、わが日の革命的左翼は、ベトナム戦争における、米帝の侵略、反革命への日本の反撃を阻止するため、あへ、世界革命政治、際政治の中心における最も生要な課題は、任務である。

25 「古、かつても今日も、八十人以上の人民が力を奮つて、始めたのが、日本における最大勢力である日本共产党は、一九六〇年、日本に進出している。彼らは、イングランドの侵略、反革命が、日本共同反革命戦争に王座上展開して、いる。」これが、日本革命体制を攻撃する政局の対応つくなむ。」

26 現在の重要な問題は、世界革命戦争が、黒さるベキ任務としてのイングランド革命戦争支援に、我々が、イングランド革命に参加する、ことによる、革命的左翼に、その使命を果すことは、全く可能であり、革命的である。

征	3	中通信
(赤軍派)	予定	200円
近日発刊	予価	
左翼的		
求め下さい。		

